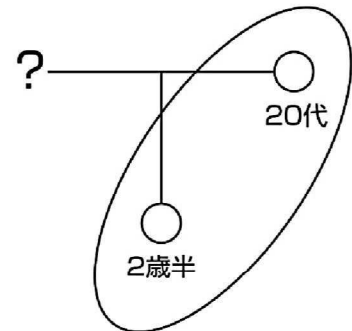


健診、予防接種が未受診の転入ケース

転入してきた家族で、転入して1年以上経つのに乳幼児健診や予防接種の通知を送っても来ない。乳幼児医療費の申請手続きにも来ない。予防接種を受けているかどうかもわからなく、名字も地元の人ではないと思われる名前で、全く様子がわからない親子だった。



電話もわからないのでアポ無し訪問をした。何回か訪問してやっと会えた。ワンルールの台所に布団を敷いて、午後だけれども今起きましたって感じで、頭ボサボサのお母さんが出てきた。玄関で話をした。子どもにも会えたが、2歳半で単語が「あ」とか「う」とかしかない。

子どもはすぐ保健師の膝に乗ってこよとしたり、すぐくっついてくる。知らない人が来ても人見知りや嫌がったりしない。母親はその様子を見て淡々としている。母親は仕事を探していると言いながらも、夜間保育園に預けているというので、夜の仕事しているのかなと思った。母親の様子がどうもなんか気になって。「ご飯食べている？」と聞いたら、「食べてる」と言っていた。保健師の訪問を嫌がるとかではないけれど、目は合わさない母親だった。きっと警戒しているだろうなって感じた。家の様子は、なんかものがいっぱい置いてあり、ヨーロッパ調の壺とか陶器製の豹とか物がいっぱいある中で布団を敷いていた。奥の部屋にはダブルベッドが置いてあった。

予防接種を受けてないし、「役場からいろいろな通知を何回もしているけれど、受けていないようなんですけれど、どうしたんですか？」と聞いたら、「受けたはず」という。母子手帳はどうしたのと聞いたら、ちょっと待てと行って、誰かに電話して「母子手帳はどこなのって」聞き始めるが、結局その時は母子手帳は見つからなくて、予防接種は受けたはずということで終わった。母親にとって役立つ母子家庭の児童扶養手当とかの手続きもまだされていなかった。

2回目の訪問時には40代中頃のおばあちゃんらしき人がいて、母親と子どもは出かけているということであった。

お金がもらえるような手続きにも来ないので、何回か電話して、やっと役場に来てくれた。その時も母親がなんかぼうっとしているというか、胸もとの肌も荒れている。「肌どうしたの」って言ったら「肌弱いから」みたいな感じで、普段から栄養的にあまりいいものを食べていないだろうなって、やせているわけではないが、食生活は乱れているなと感じた。子どもはやっぱり2歳半にしては単語がちょっとしかでないとか、その辺は気になったけれどおもちゃを取ったり返したりのやりとりは何とかできた。

児童扶養手当の係りにも、保健師が気にしている母子であることを伝えて、申請手続きの時の様子を注意して見てもらったが、言葉は少なかったが何の不自然さもなかった。

家庭訪問は2回、役場に手続きに来たときに2回会った。気になるケースであるため、言葉が遅いと言うことで今後もかかわっていこうと保健師間で相談していたら、1ヶ月後、最初の訪問から6ヶ月後には近隣の市に転出した。

転出した1ヶ月半後に、子どもが里親に連れられて役場に来た。「えっ？」とびっくりした。人づてに、母親が育てられないからと児童相談所に保護を依頼したと聞いた。よかったのか、悪かったのかわからないけれど、なんかすっきりしない。母親の様子が、昔シンナー吸っていたような感じの人、なんかちょっとぼうっとしている感じ、洋服とかもヤンキーっぽい感じではあった。

子どもが児童相談所に保護された状態を知って、ここにいた時（転出前）も本当は保護するくらいの状態を私たちは見逃していたのかなってとても気になった。

最近開発されてきた地区には新しいアパートが出来てきて、転入者が多い。地元ではない人がいっぱいいるし、「何で健診に行かないくらいで、こんなしてくるの？」「なにしにきたの？」という感じで都市化して怖いですね。オートロックのアパートは入れない。もう、気になるとか、健診も予防接種も何も受けてないとか、そういうのだったら行くしかないですよ。

乳幼児健診の未受診の訪問は本当は行くべきだがなかなかできない。未受診者であっても予防接種を受けている、乳児医療の申請を行っている、保育園に行っている、という何か状況がわかれば良いが、このケースのように全く何もわからないと心配だから訪問に行く。地元の人の場合は、運動会で見たとか、スーパーで見たとか、それで様子を見て、ああ大丈夫そうとか、抱っこしていたとかで安心することもある。

感想：乳幼児健診の未受診者を全数把握している自治体であるが、新しいマンションやアパートはオートロックで訪問に行ってもケースに会えないことが多くなっている。不在だった家に再訪問するためには保健師の数が足りない現状がある。また、訪問ケース宅周辺の事情がわからない時の家庭訪問は、保健師にとっても一人で訪問するにはリスクが高い。保健師の安全を確保するためにも複数で訪問する体制が不可欠である。

（小笹）